

の患者をインフルエンザ予防接種の対象としている。リウマチ患者に対するインフルエンザ予防接種のガイドラインはなく、個々の医師及び患者の判断に任されている。海外の文献では、特にリウマチ患者に副作用が多いとの報告はなく、患者の求めがあれば行うべきものと考えられる。しかし、本症例のような事態も起こしうることを考えると、接種後の慎重な観察と、万一の事態に対して、迅速に治療を開始できるよう患者教育が大切であると考えられる。

## II. 特 別 講 演

### 「慢性関節リウマチと T 細胞」

東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科

山 本 一 彦

## 第71回膠原病研究会

日 時 平成12年11月29日(水)  
午後6時  
会 場 新潟大学医学部  
有壬記念館

### I. 一 般 演 題

#### 1 メトトレキサートのためと思われる肝障害、 腹水、浮腫をきたした慢性関節リウマチの一例

関川 宗・秋山 史大  
大淵 雄子・大林 弘明  
伊藤 聡・坂爪 実(新潟大学)  
中野 正明・下条 文武(第2内科)

症例は69歳女性。1993年に慢性関節リウマチと診断され、ブシラミン、インドメタシンを使用された。1996年よりメトトレキサートが2.5～5.0

mg/週で使用された(総量約850mg)。2000年4月より、下肢の浮腫、腹部の膨隆が出現し、同年5月腎機能障害が認められたためブシラミン、インドメタシンは中止、汎血球減少も出現したことからメトトレキサートも中止され、6月に入院した。入院時、浮腫、著しい腹水、肝合成能障害を中心とした肝機能障害(ChE 72 IU/l, HPT 37%, GOT 66 IU/l, GPT 64 IU/l)が見られた。安静と利尿剤使用により浮腫、腹水は改善し、肝機能はメトトレキサート中止から3ヶ月後頃より回復傾向が見られた。メトトレキサートは強力な抗炎症作用を期待して、慢性関節リウマチに使用されるが、腎機能障害時には比較的わずかな使用総量で重篤な肝機能障害をひき起こす可能性があり、注意が必要である。

#### 2 三重複癌を合併した皮膚筋炎の1例

下村 裕・高橋 利幸(新潟大学)  
藤原 浩(皮膚科)  
樋浦 徹・松本 尚也(同科)  
田中 純太(第二内科)

症例は66歳男性。H11年9月から顔面・頸部を中心に浮腫性紅斑が、同年11月からは筋症状が出現。血液検査上、筋原性酵素の軽度上昇を認め、皮膚生検・筋生検でも皮膚筋炎の所見あり。間質性肺炎の合併はなし。皮膚筋炎に高率に合併するとされている悪性腫瘍の検索が施行され、肺に小細胞癌、胃に早期Ⅱa癌、大腸に腺腫内癌がそれぞれ発見された。胃癌・大腸癌は早期だったが、肺癌は進行癌であり、予後不良と考えられた。しかし、皮膚筋炎に対するステロイドの全身投与と、肺癌に対する化学療法および放射線療法が同時に施行され、両者ともに経過良好である。

【考案】皮膚筋炎発症後の全身検索で、三重複癌が同時期に発見された症例は極めて稀である。また、過去10年間に当院皮膚科を受診した皮膚筋炎患者について統計を行った結果、顔面の浮腫性紅斑と悪性腫瘍合併との間に相関がみられた。